



The 31st Kagoshima Prefecture International Cooperation Youth Experience Program

オークンチュラウン！ドウン・デアヴ村

～ 2024 年 カンボジアで過ごした夏を一生わすれない～



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県 OB 会

公益財団法人鹿児島県国際交流協会

は じ め に



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 弓 場 秋 信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通して、国際性豊かな青少年を育成することを目的に実施しています。本事業は、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県OB会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会で開催しており、平成3年にマレーシアに派遣して以来、31回にわたってインドネシア、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジア、スリランカの7ヶ国に県下一円から今回の16名を含む392名の中高生を派遣してきました。

派遣国は、予算、治安状況、ホームステイ先の確保等から候補国を検討し、コロナ禍前に訪れたカンボジアを派遣国として決定しました。本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、霧島市、薩摩川内市、枕崎市、南九州市、南さつま市からの推薦の13名と、企業の協賛を得ての実行委員会枠3名の計16名の団員は、2回の事前研修を経て、7月21日～28日までの日程で、JICAカンボジア事務所、JICA海外協力隊員2名の活動先視察、シェムリアップ州ドゥン・デアヴ村でのホームステイ、現地学生との交流を行いました。

ここに団員の日々の体験・見たこと・感じたことが綴られた報告書「オークン チュラウン！ドゥン・デアヴ村」を作成いたしましたので、多くの皆様にご覧いただければ幸甚に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援・ご協力を頂きました、共催市、協賛企業、国際協力機構JICA九州センター、JICAカンボジア事務所、心温まるもてなしでホームステイを受け入れて頂いたシェムリアップ州ドゥン・デアヴ村の皆様、そして活動中の青年海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますとともに、今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓 場 秋 信

ごあいさつ 1

鹿児島県観光・文化スポーツ部 部長 西 正 智

第31回（令和6年）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要 2

参加団員等名簿 3

スケジュール 4

地図 5

体験事業ドキュメント（総集編） 6

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

団員が感じたこと 16

「高校最後の夏」	益 満 凜 々
「あたりまえを押し付けずに」	有 馬 こはる
「チョールチョット カンボジア！」	吉 井 李 織
「自分の目で確かめる」	今 村 莉亜那
「カンボジアで改めて学んだこと」	山 口 寧 々
「最も変わった7泊8日」	岩 下 悠 愛
「出会い・気づき・成長」	中 村 龍 心
「チョムリアブスオ、カンボジア！」	鶴 本 七 望
「カンボジアが与えてくれたもの」	木 原 綺 音
「カンボジアで経験したこと」	金 丸 めいか
「最高のホームステイ」	濱 田 桃 花
「15歳真夏の冒険」	長 濱 有祐実
「オークン カンボジア」	津 平 貴 史
「私が出会ったカンボジア」	川 節 桃 香
「第2の故郷 カンボジア」	児 玉 花 菜
「私の2024年の夏」	濱 畑 和 花

団長報告 32

「世界に羽ばたく団員達の未来に栄光あれ」 松 下 正

同行者感想 33

「子供たちの力」	佐 藤 貴 之
「オークン・チュラン カンボジア！」	サナブリア智子
「カンボジアを通して感じたこと」	五反田 えりな
「カンボジアの夏」	鹿 島 彩 夏
「オークン！カンボジア！大切な家族」	熊 木 創 平

現地コーディネーターより 38

新聞記事（南日本新聞） 39

ニュース番組（KYT news every. かごしま） 44

参考資料 45

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要
「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

ご あ い さ つ



鹿児島県観光・文化スポーツ部長

西 正 智

「第31回（令和6年）鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

これも、事業実施に御尽力された弓場秋信実行委員会会長をはじめ、関係者の御支援・御苦勞の賜であり、心から敬意を表します。

また、皆様方にはかねてから本県の国際交流・国際協力の取組をはじめ、本事業に代表される青少年の海外体験の促進などに格別の御協力をいただいていることに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の体験事業では、参加者16名が、7月21日から7月28日まで7泊8日間の日程で、カンボジアを訪問し、現地で小学校教育、土木で活動を行っている青年海外協力隊員2人の活動現場を視察されたほか、現地家庭でのホームステイ等を体験してこられました。

今回の訪問国であるカンボジアは、1953年に正式に日本との国交が樹立されて以来、貿易、経済・技術協力を中心に良好な関係が続いております。2023年には両国間関係を「包括的戦略的パートナーシップ」に格上げする等、日本とカンボジアの関係はより一層親密になってきているところです。

団員の皆さんから、7月30日に帰国報告をいただきました。皆さんからは、カンボジアの人々の心の温かさや、異文化交流の楽しさ、歴史・生活習慣・文化の違いによる戸惑い、青年海外協力隊の活動を現地で視察した感想など、それぞれの体験から大変興味深いお話をお聞きいたしました。

今回の訪問で、団員の皆さんが自分の目で見て、感じ、考えてきたことは、実際に現地へ足を運ばなければ体験することのできない、たいへん貴重なものだと思います。それらを心に深く刻み、実行委員会の方や御家族、渡航先でお世話になった方など今回の訪問を支えてくださった全ての方々への感謝の気持ちを忘れず、今後も国際交流・国際協力や国際社会等についての学習を深められ、それらの担い手として、将来、御活躍いただくことを希望しております。

近年、県内の在留外国人の方々も急増していることなどから、県民の皆様方が国際理解を深め、多文化共生を進めていくことがますます重要になってきています。県では、今後とも、これに対応する必要な取組を積極的に進めてまいりたいと考えておりますので、皆様の一層の御協力をお願いいたします。

最後に、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」のますますの御発展と、関係の方々及び団員とその御家族の皆様方の御健勝・御活躍を祈念いたします。

第31回（令和6年）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- | | | | |
|---|--|---|--|
| 1 主 催 | 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会 | | |
| 2 共 催 | 鹿児島市, 鹿屋市国際交流協会, 枕崎市教育委員会,
薩摩川内市, 霧島市国際交流協会, 南さつま市友好交流推進協議会,
南九州市教育委員会 | | |
| 3 後 援 | 鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構九州センター | | |
| 4 協 力 | 在日本カンボジア王国大使館 | | |
| 5 協 賛 | <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> (株)鹿児島銀行
 鹿児島トヨタ自動車(株)
 キンコー醤油(株)
 薩摩酒造(株)
 城山観光(株)
 南国殖産(株)
 (株)ヒガシマル
 (株)南日本銀行
 (株)レイメイ藤井 </td> <td style="vertical-align: top;"> 鹿児島空港ビルディング(株)
 鹿児島ヨコハマタイヤ(株)
 小正醸造(株)
 (株)下堂園
 大福コンサルタント(株)
 日本システム(株)
 (株)M i s u m i
 (株)山形屋
 弓場貿易(株) </td> </tr> </table> | (株)鹿児島銀行
鹿児島トヨタ自動車(株)
キンコー醤油(株)
薩摩酒造(株)
城山観光(株)
南国殖産(株)
(株)ヒガシマル
(株)南日本銀行
(株)レイメイ藤井 | 鹿児島空港ビルディング(株)
鹿児島ヨコハマタイヤ(株)
小正醸造(株)
(株)下堂園
大福コンサルタント(株)
日本システム(株)
(株)M i s u m i
(株)山形屋
弓場貿易(株) |
| (株)鹿児島銀行
鹿児島トヨタ自動車(株)
キンコー醤油(株)
薩摩酒造(株)
城山観光(株)
南国殖産(株)
(株)ヒガシマル
(株)南日本銀行
(株)レイメイ藤井 | 鹿児島空港ビルディング(株)
鹿児島ヨコハマタイヤ(株)
小正醸造(株)
(株)下堂園
大福コンサルタント(株)
日本システム(株)
(株)M i s u m i
(株)山形屋
弓場貿易(株) | | |

【五十音順】

- | | | |
|----------------|---|---|
| 6 事業の流れ | 3月～5月
6月9日（土）
7月1日（土），2日（日）
7月21日（日）
7月28日（日）
7月30日（火）～7日（水）
8月17日（土）
9月～10月 | 募集・団員決定
第1回事前研修
第2回事前研修
出発
帰国
表敬訪問
報告会
報告書作成 |
| 7 派遣国 | カンボジア王国 | |
| 8 派遣期間 | 7月21日（日）～7月28日（日） | |
| 9 派遣人員 | (1) 参加者 16名
(2) 同行者 6名 | |

参加団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	市 町
1	益 満 凛 リ々	女	鹿児島県立鹿児島中央高等学校	3	鹿児島市
2	有 馬 こはる	女	鹿児島県立鶴丸高等学校	1	鹿児島市
3	吉 井 李 お織	女	鹿児島市立鴨池中学校	3	鹿児島市
4	今 村 莉亜那	女	鹿屋市立鹿屋東中学校	2	鹿屋市
5	山 口 寧 々	女	尚志館高等学校	3	鹿屋市
6	岩 下 ゆう な 愛	女	鳳凰高等学校	1	枕崎市
7	中 村 りゅう しん 龍 心	男	鹿児島県立川辺高等学校	3	枕崎市
8	鶴 本 なな み 七 望	女	神村学園高等部	1	薩摩川内市
9	木 原 あや ね 綺 音	女	薩摩川内市立川内南中学校	2	薩摩川内市
10	金 丸 まる めいか	女	鹿児島第一中学校	1	霧島市
11	濱 田 もも か 桃 花	女	鹿児島県立加治木高等学校	3	霧島市
12	長 濱 あ ゆ み 有祐実	女	南さつま市立坊津学園	9 (中3)	南さつま市
13	津 平 たか し 貴 史	男	南九州市立川辺中学校	3	南九州市
14	川 節 もも か せつ 桃 香	女	鹿児島県立大島高等学校	1	奄美市
15	児 玉 は な こ 玉 花 菜	女	鹿児島修学館高等学校	2	指宿市
16	濱 畑 のど か ばた 和 花	女	鹿児島情報高等学校	2	出水市

■ 同行者

		名 前	性別	備 考
1	団 長	まつ した ただし 松 下 正	男	(公財) 鹿児島県国際交流協会 専務理事
2	調 整	き とう たか ゆき 佐 藤 貴 之	男	青年海外協力隊カンボジアOV (野球)
3	調 整	さ と こ サナブリア 智子	女	青年海外協力隊パラグアイOV (家政)
4	健康管理	ご た ん だ 五反田 えりな	女	青年海外協力隊スーダンOV (看護師)
5	マスコミ	か し ま あや か 鹿 島 彩 夏	女	南日本新聞社 編集局報道部 記者
6	マスコミ	く ま き そう へい 熊 木 創 平	男	鹿児島読売テレビ 報道制作局 アナウンサー

スケジュール

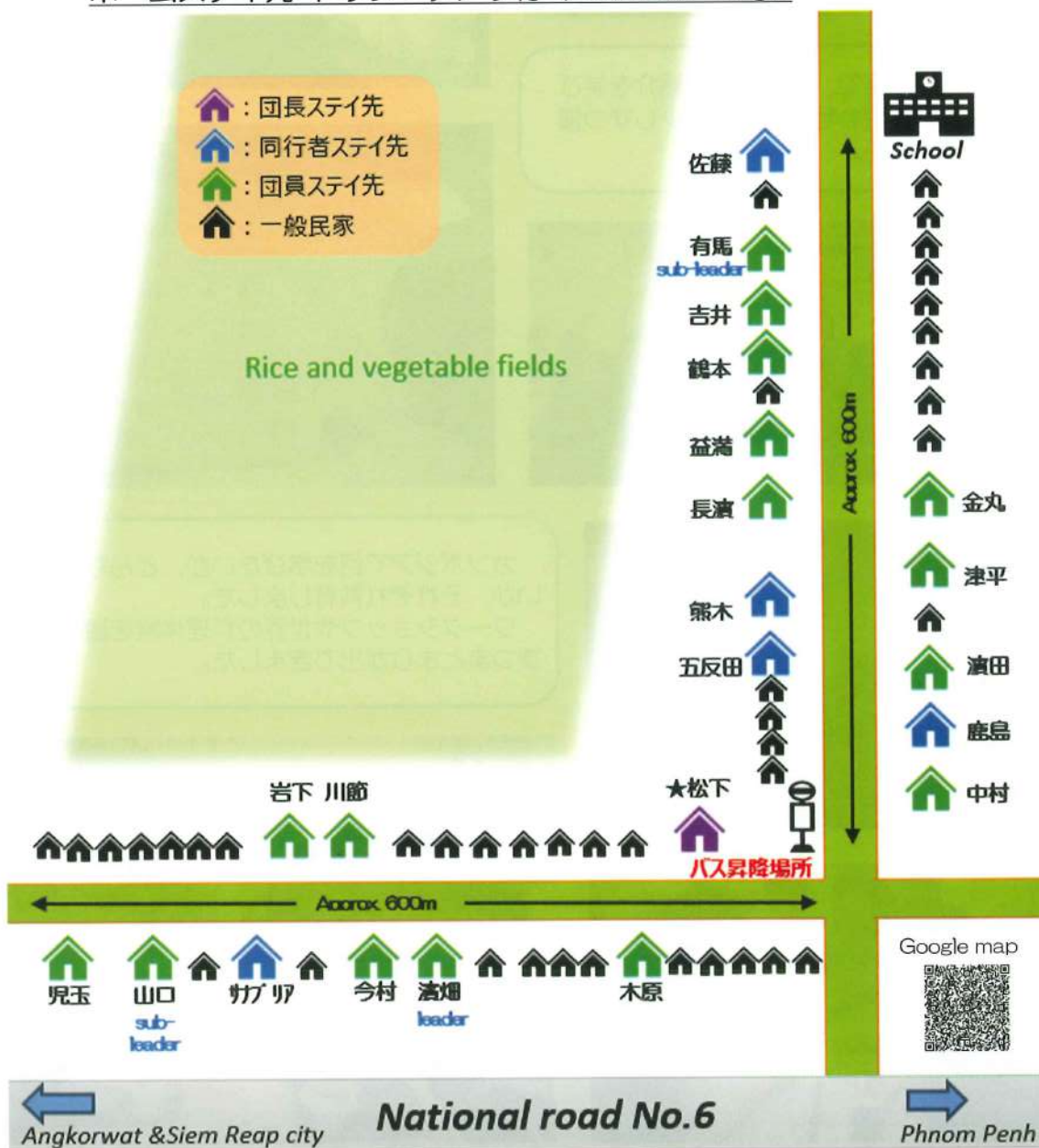
月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月21日	日	鹿児島空港	9:30		集合・結団式 チェックイン	
		鹿児島空港	12:00	KE786	✈空路、仁川国際空港へ	
		仁川国際空港	13:35			
		仁川国際空港	18:40	KE689	✈空路、プノンペン国際空港へ	
		プノンペン国際空港	22:10	専用バス	ホテルへ移動（日本語ガイドが案内）	ホテル
7月22日	月	プノンペン	午前	専用バス	JICA カンボジア事務所訪問 ホームステイ先へ移動	
		シェムリアップ	夕刻		入村式（ドゥン・デアヴ村）	ホームステイ
7月23日	火		午前	専用バス	青年海外協力隊活動視察 【小学校教育 井上大貴 隊員】 施設名：Muk Neak Primary School	
		シェムリアップ	午後		ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月24日	水		午前	専用バス	午後：海外協力隊活動視察 【土木 古山徳春 隊員】 施設名：Department of Public Works and Transportation of Siem Reap, Public Work Office	
		シェムリアップ	午後		アンコールワット遺跡見学	ホームステイ
7月25日	木		終日		ホストファミリーと過ごす	
		シェムリアップ	午後		お別れ会	ホームステイ
7月26日	金	シェムリアップ	午前		現地中学生との交流 学校名：Samdechtechcho Hunsen Chansar Secondary School	
		プノンペン	正午	専用バス	村とのお別れ	ホテル
7月27日	土			専用バス	プノンペン市内視察 （独立記念塔、セントラルマーケット、トゥール スレン虐殺博物館） ホテル発 レイトチェックアウト	
		プノンペン国際空港	23:40	KE690	✈空路、仁川国際空港へ	機内泊
7月28日	日	仁川国際空港	7:00			
		仁川国際空港	9:20	KE785	✈空路、鹿児島空港へ	
		鹿児島空港着	10:55		解団式（ロビー解散）	

地図

カンボジア王国 シェムリアップ州



ホームステイ先 ドウン・デアヴ村 (Doun Diev village)

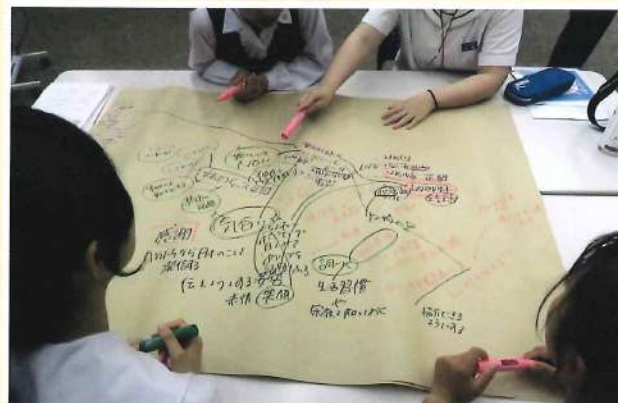


体験事業ドキュメント (総集編)

6月9日(日)～6月30日(日)
第1回・第2回事前研修



クメール語講座で、挨拶や自己紹介を学びました。手を合わせての挨拶も少しずつ慣れていきました。



カンボジアで何を学びたいか、どんな経験をした
いか、それぞれ共有しました。
ワークショップや世界の料理体験を通して、少
ずつまとまりが出てきました。



7月21日(日)
結団式・出発



『いろいろなことに挑戦して、必ず成長して元気に戻ってきます！』
不安や期待を抱える中、保護者の皆さんに向けて力強く意気込みを発表しました。

7月22日(月)

午前：JICA カンボジア事務所 訪問



JICA がカンボジアでどのようなプロジェクトを実施しているか、様々な分野のお話を聞きました。

特に教育に関する話では、小学生でも留年する児童がいることにとても驚きました。

日本の教育制度との比較を通して、いろいろな学びがありました。

7月22日(月)

午後：入村式・ホストファミリーとの対面



村に到着すると大雨が！
それでも多くの村人が集まり、入村式を開いてくれました。
とても緊張していましたが、温かい笑顔に自然と緊張も和らぎました。



7月23日(火)

午前：青年海外協力隊活動現場視察（井上大貴隊員 小学校教育）

施設名：Muk Neak Primary School



井上隊員の「同じ目線で対等に関わることが大切」という言葉に感銘を受けました。お互いが自分たちらしく、Win-Win の関係を築くことが重要だと思いました。

午後：ホストファミリーと過ごす時間

ホストファミリーが団員を集めてバレーボール交流を計画してくれました。泥だらけになりながら、みんなで楽しみました。汗だくになった後のお風呂が一番気持ち良かったです。



村に来たアイス屋さんで買い物。ふいに触れたホストマザーのおもてなしの気持ちに、言葉を越え、心が通じた気がしました。

7月24日(水)

午前：青年海外協力隊活動現場視察（古山徳春隊員 土木）

施設名：Department of Public Works and Transportation of Siem Reap, Public Work Office



豊富なご経験やデータを、カンボジアの現状とすり合わせて活動をされている点が印象的でした。古山隊員みたいに、将来はいろいろな国で働いてみたいと思いました。



午後：アンコールワット遺跡



ずっと行きたかった場所ようやく行けて嬉しかったです。細かい彫刻には、それぞれストーリーがあって、面白かったです。写真やネットで見るとは迫力が違いました。

7月25日(木)

終日：ホストファミリーと過ごす1日



午後：村とのお別れ会



日本から準備していた出し物を披露したり、カンボジアダンスと一緒に踊ったり、あっという間に時間が過ぎました。大音量で音楽を流して、1時間くらい踊ったのが最高でした！



7月26日(木)

午後：現地中学校との交流

施設名：Samdechtecho Hunsen Chansar Secondary School



午前：村とお別れ



ここでしか感じられない人の温かさを感じた。村全体が家族のようで、少し押しが強くても(笑)

団員みんなが泣く中で、ホストファミリーも一緒に涙を流していて、同じ気持ちだというのが嬉しかったです。絶対にまたここに帰ってきます！



7月27日(金)

プノンペン視察



市場でご飯を食べたり、買い物をしたりしました。日本ではできない値切り交渉も挑戦して、たくさん安くしてもらいました！活気のある雰囲気がとても楽しかったです。



トゥールスレン虐殺博物館では、強い衝撃を受け、つらい気持ちになりました。この歴史を繰り返さないために、学んだことを次に繋げると共に、私自身が、生きたくても生きられなかった数多くの人の分まで、精一杯生きていこうと思いました。



7月27日(土)

午後：プノンペン出国



あっという間の1週間。早くも“村ロス”で寂しくなりました。いつかまた、もっと成長した姿で、ここに戻ってきたいです。



7月28日(日)

帰国・解団式

団員全員、無事に笑顔で鹿児島県に到着しました。派遣を通して、みんなと“家族”になれました！



7月30日(火)～8月7日
表敬訪問



8月17日(土)
報告会



カンボジアでの学びと、今後の未来への想いを伝える報告会。多くの方にご参加いただきました。
この研修で得た体験や出逢いは、一生モノの経験です。オーブン!

団員が感じたこと

高校最後の夏

鹿児島県立鹿児島中央高等学校3年

益満 凛々

今回の7泊8日のカンボジア研修は、今までで1番充実した1週間となった。沢山の人に出会い、沢山の優しさに触れ、沢山の発見があった。

首都・プノンペンから6時間程かけて、シェムリアップにあるホームステイ先のダウン・デアヴ村に向かった。バスが村に着いた途端、スコールで大雨にもかかわらず、沢山の村人が笑顔で出迎えてくれた。私のホストファミリーは8人家族で、笑いが絶えない、とても賑やかな家族だった。ホストシスターの双子のSreydechとSreyponは同世代であるからか、すぐに打ち解けることができた。英語が話せない他の家族の通訳になってくれたり、村を案内してくれたり、一緒に踊ったり。村で過ごしたほとんどの時間を2人と過ごした。2人は頻繁に”Are you happy?”と尋ねてきた。私が少しでも不安や心配を感じると、すぐに気づいて気にかけてくれていた。そんな2人の優しさに触れる度に村を離れたくないという気持ちが大きくなっていった。

毎晩、ホストファミリーはみんな、高床式の家の1階に集まった。互いの文化や言語を教えあい、日本から持ってきたオセロをした。そんな中、2日目の夜、ホストシスター達は私に”I'll miss you because I love you.”と言って抱きしめてくれた。まだ出会って2日しかたっていないのに、私を本当の家族のように想ってくれているのがとても嬉しかった。

沢山の友達ができ、村での生活に慣れてきた頃、お別れの日がやってきた。前日のお別れ会の時から泣いてばかりの私に、ホストファミリーは「ニョニウム（笑顔!）」と言いながら涙を拭いてくれた。育った環境が違って、言葉が上手く通じなくても、「心が通じ合うって本当にあるんだ!」と実感することができたホームステイの5日間であった。

研修中はホームステイだけでなく、青年海外協力隊の方の活動を実際に視察する機会もあった。特に印象に残っているのは、現地の小学校で活動する井上大貴隊員を訪れたことだ。途上国の学校教育の現状を目の当たりにした。元々国際協力に興味のあった私は、井上さんの話に興味津々であった。「日本から援助をし

てあげるという上からの気持ちではなく、お互いが良いところを伝え合うイコールの気持ちが大切」という話が印象的だった。先進国の日本でも、密な人間関係や自給自足の生活等から、カンボジアだからこそ学ぶことのできる何かがあるのだと改めて感じることもできた。

高校生3年生の夏。進路において1番大事な時期に1週間もの間、海外に行くことに最初は少し不安を感じていた。しかし、この研修で、旅行では絶対に経験することのできない大切な思い出が沢山できた。自分の将来のビジョンもみえてきた気がする。大事な時期だからこそ、この経験ができて良かったと心の底から思う。

カンボジアの家族や友達、現地ガイドのお二人、団員のみんなや同行者の方々、事務局のお二人、この事業に関わってくれた全ての人に感謝を伝えたい。オーくん!!



(本人：右) ホストファミリーとお別れ



(本人：右) プノンペンのレストランにて

団員が感じたこと

あたりまえを押し付けずに

鹿児島県立鶴丸高等学校1年

有馬 こはる

研修が始まる前ワクワクしながらカンボジアについて調べていた時、私はびっくりする数字を見つけました。それはカンボジアの妊産婦死亡率が日本の約55倍、新生児死亡率が13倍も高いというデータです。そしてJICAがそのような国々を援助するために母子手帳を普及させる活動をしていることを知りました。カンボジアの母子手帳をこの目で見えることを密かなテーマとして、私は自分の母子手帳をバックに詰めてカンボジアへ旅立ちました。

プノンペンでの活動1日目に訪れたJICAカンボジア事務所で、母子手帳について早速隊員に尋ねてみました。しかしカンボジアではまだ十分普及していないとの返事で最初からちょっと予定外。でも、ダウン・デアヴ村にバスが到着して、嬉しそうに満面の笑みで私たちを見つめる村の人々が窓の外に見えた時にはすでに母子手帳のことは忘れていました。はやる気持ちを抑えながらバスを降りると、先に降りた団員に抱きつく子どもたちもいて、私まで嬉しくなりました。私のホストファミリーには10歳、6歳、3歳の子どもがいました。もしかしたら母子手帳があるかもしれない！と思い出し、自分の母子手帳を見せながら身振り手振りで伝えました。でもそんなものは見たことがないという雰囲気でした（もしかしたらうまく伝わらなかったかもしれませんが…）。近所の人たちに聞いても同じで、私は「これだから死亡率が高いんじゃないの?!」と思いました。しかし、4日間のホームステイを経験し、この村の人たちは日本人ほど母子手帳を必要としていないのではないかと気づきました。なぜなら、村の人たちはまるで一つの家族のように生活していて、朝ご飯と夜ご飯と一緒に食べる顔ぶれがなぜか毎回少しずつ違うほど。実際に誰が誰の子どもなのか、親なのか、どこまでが一つの家族なのかすらわからなかったのは、言葉が通じなかったせいだけではないでしょう。子どもたちは皆キラキラした目でじゃれあっていて、村の大人たちは皆、高床式の家の軒下に椅子を並べて、子どもたちをのんびり見守っています。ここでは母子手帳がなくても安心して子育てできるのかもしれないと感じました。エアコンもなくお

湯も出ない環境で生活するのは大変なこともあるだろうと思いますが、日本では経験したことのないほんわかとした気持ちや周りの人と繋がっている安心感を実感することができ、日本での当たり前を押し付けようとしていた自分が恥ずかしくなりました。

このような貴重な体験をさせてくださったダウン・デアヴ村の方々、国際交流協会、鹿児島県、鹿児島市、JICAの方々、快く送り出してくださった学校の先生方、自分の家族への感謝を忘れず、今この瞬間から、自分の当たり前を押し付けることなく、身の回りのすべての人に笑顔で接して、カンボジアの人々のように助け合いながら生活したいと思います。そしていつかカンボジアに恩返しができたらいいと思います。



(本人：中央) ホストファミリーとのお別れの時



村のみんなが集まる売店

団員が感じたこと

チョコレート カンボジア！

鹿児島市立鴨池中学校3年

吉井 李織

日本を一週間離れ、見ず知らずの国で過ごす。そのようなことを私は今まで経験したことがなかった。

加えて、水を溜めただけのお風呂、水洗でないトイレ、自分たちになじみのある英語は通じず、蚊に刺さたら最悪の場合死に至る。説明会でこう言われたときには、期待より不安の方が圧倒的に大きかったことを今でも鮮明に覚えている。

知らない環境に飛びこむなか、日本の大好きな家族と友人たちの顔を見るところが声すら聞けないのは、私にとってかなりの苦痛だった。そんな中私が潰れずに、むしろ生き生きと帰国できたのは、カンボジアで本当の人間の温かさに触れたからだと思う。

今回、私にとって初めての開発途上国訪問であったこともあり、私はカンボジアでのホームステイがとても不安だった。特に衛生面や生活面などについて、恐怖に似た感情さえ覚えていた。そんな心境で迎えたホームステイ。私のホストマザーはあまり感情を表に出さない不愛想な感じの人で、最初の二日は少しギスギスした関係が続いた。そして迎えた三日目。ホストマザーから逃げるように庭に出て遊んでいた私たちのもとにアイスを売りに来たバイクが止まった。子どもたちがバイクを取り囲み、それぞれ好きなアイスを購入するなか、私も何か買おうと思い、売っている男性にお金を差し出そうとすると、後ろから来たホストマザーに強く止められた。不思議がっていると英語が話せる隣の家のお姉さんがホストマザーの言っていることを翻訳してくれた。

「私たちの家にわざわざ日本から来てくれただけで嬉しいから私たちにおもてなしさせて。」ついさっきまで私がホストマザーに対して抱いていた印象とは全く異なるものだった。そして同時に、人を第一印象だけで決めつけてはいけないということを強く実感した。

それからは全力でおもてなしをしてくれるホストファミリーに対して、私も素直に受け止めて接するようになった。全然得意ではないダンスや運動も笑顔であれば意外と楽しい面もたくさんあった。そうしていくうちに、気まずさのようなものを感じていた私たちの関係がどんどん親密になっていくような気がして毎日

が楽しかった。

そんな天国のような日々は永遠には続かず、日本に帰らなければならない日が来た。最初は手紙を書こうとしたが、やっぱり顔を見て伝えたくて、一所懸命に感謝の気持ちを伝えた。ホームステイ中は全くと言っていいほど感情を表に出さないホストマザーもこの時だけは泣いていて、私も思わず泣きそうになった。

私は、この派遣で大きな気づきを得た。それは「まず受けとめる」ことだ。否定や批判なんて後からいくらでもできる。まずは受け止めて、自分に反映させてみる。カンボジアの家族からもらった気づきを日本の生活でもっともっと深め自分のものにして、数年後、立派に成長した姿をもう一度カンボジアのホストファミリーに見せに行きたい。そう強く思った。



(本人：中央) ホストファミリーと



(本人：右) ホストシスターのチャン・ウーと

団員が感じたこと

自分の目で確かめる

鹿屋市立鹿屋東中学校2年

今村 莉亜那

出発前、国際線のロビーで後悔しました。なぜなら、私はクメール語で挨拶と自己紹介しか話せないからです。「ジェスチャーや表情が役に立つとはいえ、ホームステイで会話が續かないようなことがあるかもしれない」「もう少し勉強しておけばよかった」などと思いつつ、不安とともに鹿児島空港を出発しました。

仁川国際空港を経由してほぼ半日かけてようやくついたカンボジアの首都プノンペンには、想像以上に都会でした。鹿児島にはないくらい高い建物がたくさん建てられていて、夜中でも人通りが多く賑やかでした。ホテルの大きな窓から、バイクやトゥクトゥクが盛んに通り、所狭しと屋台の並ぶプノンペンの街を眺めながら、ようやく日本を離れた実感が湧きました。

私は今回の体験事業でホームステイが1番心に残っています。私のホストマザーは会ってすぐに私を抱きしめて笑顔で話しかけてくれて、すぐにうちとけることができました。2人のシスターは緊張していたようですが、時間が経つにつれて私がどこに行くにもついてくるくらい仲良くなりました。私の家はシャワーがなく、溜めている水で水浴びをしました。その時に置いていた私の服にタランチュラがついて離れず、格闘する羽目に遭いました。次の日の朝起きた時に蚊帳にもしがみついていた、この事件は一生忘れません。そうしたハプニングがありましたが、マザーやシスターたちと一緒に料理をしたり、折り紙をしたり、かけがえのない時間を過ごすことができました。思っていたよりコミュニケーションも取ることができ、ホストファミリーみんなが私の伝えようとしていることを理解しようとしてくれたり、私が聞き取りやすいようにゆっくり話してくれたり、行動や気持ちがとても嬉しかったです。また、お互いの言語を教え合って、少しクメール語を覚えることができました。近所の子供達や近くの家でホームステイしている団員とお互いの国の歌を歌ったり、バレーボールをしたりもしました。村全体が一つの家族のようで、とても楽しかったです。お別れの時はマザーが涙を浮かべながら「本当の娘のように思っているよ」と言ってくれて心に沁みました。

また、現地の小学校訪問がとても印象に残る体験に

なりました。先生が自分の赤ちゃんを乗せたベビーカーをひきながら授業をしていて、生徒たちが赤ちゃんの相手をするということもあと聞きしました。義務教育の中で留年もふつうにありえるそうで、同じ小学校でも日本と違うところも多かったです。

カンボジアの一週間は、本当にあっという間でした。私はカンボジアに行つて「実際に体験して初めて気づくことがある」ことを実感しました。テレビやインターネット、本で海外について知ることと、実際に現地に行つて自分の目で見て、自分の肌で感じることで得られる情報が全然違いました。「一生モノ」になったこの経験は無駄にせず、将来絶対に役立てます。Arkoun chraen!!



(本人：左) ホームシスターたちと



赤ちゃんを連れて授業

団員が感じたこと

カンボジアで改めて学んだこと

尚志館高等学校3年

山口 寧々

日本から3360kmの距離にある国カンボジア。出発前は開発途上国と聞いて、負のイメージを持っていました。ですが8日間の研修を通して自分自身の考え方や価値観が大きく変わりました。

JICAの活動視察で小学校に行った時、私達が挨拶をすると立ち上がって挨拶を返してくれる子供達の礼儀正しさに心を打たれました。どのクラスも靴や机が綺麗に並んでいて、一見日本とあまり変わらない様に見えました。しかし、現地で働く井上隊員の話を知ると、教科書や筆記用具を揃えられる子と揃えられない子で学力の差が出来てしまうことや、教科書自体に誤りがあるなどこれから解決していかなければならない点が沢山あることを知りました。

そして私が1番印象に残っているのが校内でベビーカーを押す先生と会った事です。その先生が子育てをしながら働いている事を知り、日本では見ない光景に驚きました。ですが働きながら子育てができる環境は日本が見習うべき点だと思いました。

土木の古山隊員の視察では、雨季と乾季に分かれているカンボジアならではの気候と共生する難しさを学ぶことが出来ました。

4日間のホームステイでは、想像を超えるおもてなしに感銘を受け、今までにない喜びを感じました。最も印象に残っているのは、ホストファミリーが「お別れ会に着て行ってね」と私のサイズに合わせて縫ったスカートをプレゼントしてくれた事です。本当に嬉しくて今でも大切にしています。他にも、料理の味付けが私に合うか調節してくれたり、私が美味しいと言った料理をもう一度出してくれたりなど温かく親切に受け入れてくれました。

近所の子供たちとも本や翻訳を使ってお互いの国の言語や歴史を教え合ったりして仲を深めることが出来ました。初日はお風呂やトイレなど慣れないこともありましたが、村を離れる時は、本当に悲しくて涙が止まりませんでした。そう思えたのも村の人達が優しく私たちを想ったおもてなしをしてくれたからだと思います。

滞在7日目に訪れたトゥールスレン虐殺博物館では、

看護師を目指している私にとって、学ぶことがある場所でした。実際に虐殺が行われた場所は言葉で表すことの出来ない雰囲気でした。私はこの事業に参加するまで虐殺が行われていた事を知りませんでした。今回風化していない歴史に触れ、改めて命の重みについて学ぶことが出来ました。それと同時にこの歴史についてもっと多くの人に知って欲しいと思いました。

1週間という短い期間でしたが、絆を深めた団員やホストファミリーとの出会いを通して人と人の繋がりの大切さを感じました。話している言語や文化、価値観など違う所だらけでしたが、お互いの分かり合おうとする気持ちや、違いを尊重する気持ちが何よりも大切だと思いました。

最後にこの体験事業でしか得ることのできない学びや感情をもっと多くの人に体験してもらいたいです。この事業に携わる全ての方に感謝しています。本当にありがとうございました。



(本人：左) 現地で仲良くなった友達



ホストマザーと作った朝ご飯

団員が感じたこと

最も変わった 7泊8日

鳳凰高等学校1年

岩下 悠愛

私は、この研修の中で最も影響を受けたのはホームステイ先であった様々な出来事だと考えています。私はこの研修に参加するまで海外渡航の経験がなく、内心は「上手くなじめるかな」「意思疎通ができるだろうか」と不安でいっぱいでした。しかし、そんな不安はホストファミリーに会った瞬間に吹き飛ばされました。なぜなら会ったその瞬間にホストファミリーは私を抱きしめ、そのあともずっと手を握り微笑みかけてくださったからです。私はカンボジアで使われるクメール語は挨拶と自己紹介しか話せません。初日は上手く話せず、その日の夜寝る前に「話したかった」という悔しい思いが溢れました。次の日から少しずつ、現地の方の言葉を真似たり、身振り手振りをしたりしてコミュニケーションを図りました。最初は上手くいきませんでしたが、続けていくうちに「今、こんなことを言おうとしているのだろうか」というのがなんとなくわかるようになりました。「伝えたい」、「話したい」という思いが私と現地の人々をつないでくれたように感じました。そのように過ごしていた村での生活の中でも特に印象に残っていることがあります。それは「村全体が家族のようだ」ということです。当たり前のように近くの家が集まって家族じゃない人とも一緒にご飯を食べたり、夜の時間を一緒に過ごしたりしました。その経験は一人っ子の私には本当に兄弟や姉妹ができたように感じました。そして村で過ごしていくうちに、私はホームステイに来ているというよりも、第2の家に帰ってきているように感じるようになりました。それはホストファミリーを始め、村の皆さんが私を本当の家族のように受け入れてくださったからです。

そんな何かを「受け入れる心」を学び、それを実践できたのがホストファミリーとの食事で蛙が出された時です。私は昔からカエルが苦手ですが、もちろんホストファミリーはそのことを知りません。そのため、カエルをいつも通りに食事として食卓に並べました。最初は何の肉が分からず「これはなんのお肉？」と尋ねました。すると「カエルのお肉よ」と返されました。もしも日本で出されたならば、「苦手だから」と断っ

て食べなかったでしょう。しかし、「現地の人たちになじみたい」という思いからチャレンジすることができました。このように私は、「苦手なものも受け入れる心」をもつようになりました。これは、日本にいたら決してなることのなかった自分です。そしてそんな自分に出会わせてくれたホストファミリーと村の人たちに心から感謝しています。

この研修で他にもたくさんのことを学びましたが、この経験が私の内面を最も大きく変えてくれたと感じさせることでした。私はこの研修で学んだことを自己完結させるのではなく、身近な人に伝えていきたいと考えています。そしていつか、私を受け入れてくださった村の皆さんに恩返しがしたいです。



(本人：左) ホストファミリーとのお別れ



(本人：後列左) 村のみんなが大集合

団員が感じたこと

出会い・気づき・成長

鹿児島県立川辺高等学校3年

中村 龍心

出発の前日、私は一睡もすることができませんでした。昔から興味があることには恐れずに挑戦するというのが私の性格ですが今回ばかりは不安と緊張で胸がいっぱいでした。鹿児島空港をでて韓国経由でカンボジアのプノンペン空港に到着しました。ホテルについて次の日から始まるホームステイに期待で胸を膨らませてその日は眠りにつきました。

次の日、ホームステイ先の村に向けてバスで長時間移動をしました。村に近づくにつれて楽しみだった気持ちに気がつけば不安に変わっていました。ですが村に着きバスから降りた途端ホストファミリーが迎えに来てくれてハグをしてくれました。緊張がほぐれて涙がでそうなほど嬉しかったのを今でも覚えています。その日の夜、私は覚えてたのカタコトのクメール語で自己紹介をしました。発音もイントネーションも違ったと思いますがホストファミリーが親切に耳を傾けてくれてなんとか伝えることができました。もちろん楽しかったことばかりではなく、お風呂の水は川から引っ張ってきてる水だったり、覚えてきた言葉も半分以上通じなかったりと辛いことも少なくはありませんでした。ですが2日目からはホームステイ先の生活に慣れ、それと同時になにもかも受け入れられるようになりました。今の日本ではあまりみることがない光景ばかりでなにもかも新鮮でした。ホームステイ最終日の前日、私はお土産と感謝の手紙を読んでプレゼントしました。少しの間でしたが沢山の思い出ができて気がつけばホストファミリーと私の目からは涙が溢れていました。

この数日間のホームステイを通して私は気づいたことが2つあります。1つ目は言葉の壁は大きくないということです。挨拶と感謝の気持ちさえ伝えることができればあとはジェスチャーやボディランゲージで伝えることができました。言葉をもっと勉強しておけばもっと充実したホームステイになったと思いますが、このことは私の大きな自信になりました。2つ目はカンボジアにはカンボジアの生活の良いところがあるということです。これは実際にホームステイをしてみても自分で現地の生活に触れないと分かりませんでし

た。開発途上国に対する考え方、価値観などなにもかもが変わり本当の幸せとはなんだろうと考えるきっかけになりました。

この他にも現地で活躍されているJICAの隊員の話を通して国際協力に興味を持つことができ、カンボジアの現状とそこから生まれる課題について知ることが出来ました。この課題を解決することはどのくらい難しいことかも知ることができました。そこで私は将来看護師になり青年海外協力隊に参加してカンボジアに限らず様々な国の問題に少しでも貢献できたらと考えました。私にとってこの研修は本当に刺激的で、私を1回も2回も成長させてくれました。7泊8日の研修の中で辛いこともあったけど、1番の心の支えになってくれたのは団員の仲間たちでした。裏で支えてくれた方々にも本当に感謝しています。オーくん！



ホームステイ先の光景



(本人：左) ホストファミリーとの初対面の様子

団員が感じたこと

チョムリアプスオ、カンボジア！

神村学園高等部 1 年

鶴本 七望

カンボジアでの一週間は私を大きく成長させてくれました。特に研修を通じて「自分を出すことの楽しさ」を学ぶことができたと感じています。これまで日本で過ごす中で、周囲に対して遠慮してしまうことが多く、楽しみたい時でも周りを気にして自分を 100% 表現できない場面が多くありました。特に楽しさを共有する場面では、他人の目を気にするあまり、本来の自分を出し切ることが難しいと感じることがしばしばありました。しかし、カンボジアでの研修を通じて、そのような制約を乗り越え、自分をより自然に出すことの楽しさを実感することができました。

カンボジアでの研修は、私にとって初めての異国での生活という新しい挑戦でした。鹿児島にいたときは全く感じていなかった現地の生活に対しての不安も、プノンベン空港から村へ向かうバスの中では「受け入れてもらえるかな」「コミュニケーションをしっかりと取れるかな」と不安と緊張感が高まるばかりでした。

ハグで暖かく迎え入れてもらった入村式から始まった村での生活。村全体が家族のようで、庭で話していたら隣の家の知らない子供が遊びにきたということはよくありました。

村での研修中、特に印象的だったのは子供達と一緒に過ごした時間です。言葉が通じないこともあり、最初はお互い遠慮してしまいうまくコミュニケーションを取ることができませんでした。そんな私が彼らと親しくなったのは「遊び」の中ででした。1 番人気だったのは、黒くて長い羽根に赤いバネのついたおもちゃ。生まれて初めて見るものでしたが、遊んでいた子供たちが、遠くで見ていた私の手を引っ張って「一緒に遊ぼう！」と誘ってくれました。初めての体験ばかりで戸惑うばかりの私に、楽しそうに教えてくれる子供たち。その様子を見て、次第に私もリラックスしへとになるまで楽しむことができました。言語の壁を超えて心を通わせることができたと感じた瞬間、「ここにきて良かった」と心からそう思えました。

この体験から学んだことは、言葉や文化の違いを超えて人間関係を築くためには「自分を曝け出して心で通じ合う」ことが重要だということです。子供達やホ

ストファミリーと過ごす中で、言葉が通じないからこそ、真心や笑顔、ボディランゲージがいかに大切かを実感しました。全体の交流を通じて、私自身が素直に楽しむ姿勢を持つことで、相手にもその楽しさや信頼感が伝わることも学びました。この経験は今後の国際的交流でのコミュニケーションにおいて大いに活かせるのだと思います。

「村に帰りたい！」帰国して 1 番最初に思ったことでした。鶏の声で起こされる朝や、とても冷たいお風呂。その時はすごく嫌だったことが、日本に帰ってきてみて恋しくなったのは自分でも驚きでした。こんなにも多くの気づきや学びをくれたカンボジア。こんなにも充実感と学びのある、宝物のような一週間には感謝しかありません。オークン、カンボジア！



村とお別れの様子



(本人：左) 遊んだ後のアイスタイム！

団員が感じたこと

カンボジアが与えてくれたもの

薩摩川内市立川内南中学校2年

木原 綺音

バスから降りた瞬間、知らない言葉を投げかけてくるシェムリアップの村の人たち。翻訳機能を持たない私は、言葉の壁をどのようにして乗り越えたらよいかととても不安な気持ちでホームステイをスタートさせました。事前研修では、生活習慣についての説明を受けていたものの、会話のやりとりについては簡単なクメール語しか学んでいなかったため、村の人たちが発する言葉が暗号のように聞こえ、気持ちが焦り、コミュニケーションのとり方への不安が一気に大きくなりました。

そんな不安を落ち着かせてくれたのは、笑顔でむかえてくれたホストファミリーの存在でした。家に向かう途中、4歳のホストシスターは小さな手で私の手を握りしめ、嬉しそうに顔をのぞきこんできました。その顔は今でも鮮明に覚えています。私の気持ちは次第に落ち着き、ホストシスターの手を握り返すことができました。

家に着いて最初に驚いたことは、階段の狭さでした。つま先で歩かないと足を踏み外してしまいそうな階段だったので、居住空間のある二階まではおそるおそる上がりました。

心配していたお風呂とトイレは、予想通り水が冷たく、シャワーもトイレトペーパーもありませんでした。お風呂の水は川からくんでいるので、所々に虫が浮いていたり、赤土のおいがしたりしました。こんな水で体を洗っても清潔に保つのは難しいと感じました。何よりも衝撃的だったのは、二匹の巨大な蜘蛛がお風呂の壁に常に張り付いていたことでした。大の蜘蛛嫌いな私にとって一番受け入れがたい出来事でしたが、受け入れるしかないと自分に言い聞かせました。

表情やジェスチャーで互いの思いが伝え合えるようになり、言葉の壁を感じなくなった頃、別れの日がやってきました。いつも笑顔を絶やさなかったホストマザーの目が涙でいっぱいになった瞬間、私の目からも涙があふれ出しました。村全体が大きな家族のような集団で、困ったときにはすぐに協力し合い、互いを尊重し合えることに、ここにしかない『幸せ』を感じたからこそ、想像以上に辛い別れとなったように思いま

す。

私は将来、国際協力に関する仕事に就きたいと考えており、そのことが今回の事業に参加した一番の理由でした。研修に参加するまでは、先進国が開発途上国を支援していくという、上から目線の見方をしていましたが、そうではなく、互いの国の生活習慣や価値観のちがいを受け入れ、協力し合い、支え合う関係こそが国際協力だということを学びました。電化製品が十分なく、衛生状態も決して整った環境ではないけれど、カンボジアの文化や生活の仕方には日本にはないよさを感じ、そのことをもっと周りの人にも伝えていきたいと思います。今回の経験は、将来の夢に向かって努力し続けたいという気持ちをよりいっそう強くしたことは言うまでもありません。必ず実現させます。私を応援し、支えてくださったすべての方々、本当にありがとうございました。オークン！



(本人：左上) 大切なホストファミリー



思い出のお風呂とトイレ

団員が感じたこと

カンボジアで経験したこと

鹿児島第一中学校 1年

金丸 めいか

「言葉が通じなかったらどうしよう」「食べ物が食べられなかったらどうしよう」行く前の私は、楽しみな反面、そう不安に思っていた。なぜなら私は初めて、家族と離れて海外で7泊8日を過ごすことになっていたからだ。しかし、村に着くと、その不安は無くなった。ホストファミリーはとても優しく、たくさんのおもてなしをしてくれた。初日から、覚えていったいくつかのカンボジア語を使うことができた。カンボジアは日本とは違うことが多く、初日はたくさん戸惑ったけど、2日目からは慣れていった。例えば、水浴びは、朝と夕方2回であることや、ご飯だ。ご飯は、初めて見る果物や、味わったことのない味付けの卵焼きも食べた。しかし、初めてにもかかわらず、私たちの口に合うものだったので、毎日お腹いっぱい食べた。私の家のホストシスターのデヴィとヴィヴィは、暇な時に、一緒に散歩しよう！と言ってきた。私のホストマザーと、向かいの家のお母さんが姉妹だったので、よく行き来していた。向かいの家の3歳の男の子、ターネイがよく懐いてくれた。その子たちに金平糖をあげたら、お別れの日まで袋を握りしめてくれていた。また、お土産の塗り絵やシール帳も気に入ってくれた。毎晩のように、ホストシスターの7歳のデヴィが、読めるようになったばかりのカンボジア語を一生懸命教えてくれた。お母さんは優しく、私が服を洗おうとしても「いいよ、いいよ」とやってくれたり、毎食ご飯を作ってくれて、朝も集合場所まで一緒に行ってくれた。また、家族や親戚とバドミントンを楽しんだ夜もあった。私の家は屋根の下に、家があったので、スコールが降ってもご飯を食べたり、遊んだりした。気温は日本より暑いと思っていたが、そうでもなく、湿気も少なかったので一日中快適だった。「この村のような場所に住みたい！」と思ったほどだった。

また、JICA事務所の訪問や、青年海外協力隊の実際の活動を見て、カンボジアの教育の現状を知った。教科書の内容に誤りがあったり、学校で、わざと大事なことを教えずに、自分の塾でお金を取って教えている先生もいると知った。そして、初等教育でも、留年や退学があるということも知った。

質の高い教育をみんなが受けられる日本はとても幸せな国なんだと改めて気付かされた。

最初は、あんなにも不安だった気持ちが、こんなにも「楽しい」「帰りたくない」という気持ちに変わっていた。ガスも水道も通っていない村だったが、村での生活は、思っていた以上に快適だった。初めてのことで驚くことも多かったが、それも楽しいと思えた。私は、またカンボジアのこの村に来たいと思った。また、青年海外協力隊の活動を実際に見て、国際協力にも興味を持った。私は、これからも、勉強を頑張ろうと思った。今回の海外研修の経験は私にとって、一生物の宝物になった。

オークンチュナム！（本当にありがとう！）



（本人：左）大好きなホストファミリー



（本人：左）ホストシスターとお散歩

団員が感じたこと

最高のホームステイ

鹿児島県立加治木高等学校3年

濱田 桃花

今回のカンボジアへの研修は、私にとって初めての海外渡航であり、初めてのホームステイとなりました。出発前、日本語が全く通じない環境で過ごすことに大きな不安を感じていたことを覚えています。特に、コミュニケーションの面で、自分の思いをうまく伝えられるかどうかがとても不安でした。

村の人たちとの対面のとき、私は受け入れてもらえるかどうかとても心配でした。しかし、バスを降りてみると、村の人たちはとても明るく私たちを出迎えてくれました。村の人たちの明るい話し声、活気、笑顔が不安だった私の心を和ませてくれました。私のホストファミリーは、ホストマザーのシンさんと私の一つ上のホストシスターのセオウェイで、ホストファザーは仕事でほとんどいませんでしたが、二人は私を本当の家族のように接してくれました。ホストマザーが作ってくれる料理はどれもとても美味しく、毎回の食事がとても楽しみでした。ホストシスターとの会話で私はカレーが好きというので、次の日の食卓にはカレーが作ってありました。その時は本当に嬉しかったです。

心配だったコミュニケーションも、指差し会話帳やジェスチャーを使ってできる限り自分の思いを伝えようとしていました。国が違えばジェスチャーも違って、最初はホストファミリーのジェスチャーを理解することが難しかったです。しかし、コミュニケーションを続けることによって、相手が何を伝えたいのかがだんだんわかってきて、楽しくなってきました。思いが通じ合った瞬間は、言葉に表すことができないような喜びを感じることができます。

日本と違ったのはジェスチャーだけではありませんでした。ホストシスターが家の庭を案内してくれたとき、バナナやドリアンが植えてあったり、数十匹の鶏やアヒルがいたりしてとても驚いたことを覚えています。また、お風呂の水やトイレの水など人が口にする以外の水は雨水や川の水を使っていました。今の日本よりも自然に密接している暮らしであると感じました。また、果物にこしょうなどいろんな調味料をつけ食べていました。一番ビックリしたのは、唐辛子のような赤い調味料をつけていたときです。私が辛そうと言う

と辛くないよと言ったので食べてみました。すると、自然と涙が出てしまうくらい辛くて、今まで食べた中で一番の辛さでした。

村との別れのときは、たくさんの思い出が頭の中をよぎって涙が止まらなくなってしまいました。ホストファミリーが、お別れは笑顔で、また会おうと言ってくれて、私もまた会いたいと強く感じました。この4泊5日のホームステイは私にとって、コミュニケーションの面でも、異文化交流の面にとっても、多くの面で本当に素晴らしい経験となり、自分自身も大きく成長したと感じます。この経験を活かして、今後もグローバルに活躍できる人になりたいです。両親や団員、カンボジアの村の人など、この事業に関わってくれたすべての人に感謝しています。オークン！



(本人：右) ホストシスターと友達



(本人：レシーバー) 村の人たちとバレーボール

団員が感じたこと

15歳真夏の大冒険

南さつま市立 坊津学園9年

長濱 有祐実

地理の教科書で見たあの光景。家は高床式、水は井戸や川から汲まれたもの、食事もトイレも日本とは全く違う環境。ここから7泊8日間の非日常生活が始まりました。覚悟を持って臨んだこの事業。朝起きてから就寝まで生活における些細なことでのカルチャーショックが多く、やっていけるか不安の連続でした。ですが、カンボジアでの生活に慣れた頃にお別れとなりあっという間の8日間となりました。言語が通じないことは当たり前。コミュニケーションをとる中で笑顔が大切なのだと改めて感じました。英語や翻訳アプリを使って私に一生懸命伝えようとしてくれるあの姿、意思疎通ができたあの瞬間とても嬉しくなったのを鮮明に覚えています。日本とは違う環境での生活。外から見る日本はやはり便利。この便利な生活に慣れているからこそ気づくことが多かったと今では思います。初めての連続で思うようにもいかず「怖い、日本に帰りたい」と嘆き涙を流した日もありました。その不安を安心に変えてくれたのはホストファミリー。カンボジアでは涙を流すことはあまりいいと言われていません。そのため、ホストマザーが「泣いたらダメ、笑って、サウイサウイ。」といつも声をかけ寄り添ってくれていました。今ではあの涙は私自身をより強くそして、ホストファミリーとの絆を深くしたものだと感じます。

現地で教員をしている井上隊員の話も聞きました。「教育という仕事をする場が違っただけであって、していることは同じ。」「何かをしてあげるではなく一緒にする。」この言葉を聞いて捉え方を変えれば行動も変わるのだと思いました。私自身、将来看護師として青年海外協力隊の一員となり世界の医療の発展に貢献したいこの夢を叶える第一歩として参加したこの事業。井上隊員の話聞くまでは、「助けてあげたい、何かしてあげたい」とただ思っているだけでした。ですが、それでは何も変わらない中途半端な気持ちで行動しても助けにはならないと感じました。1番心に残っているのは一緒によさこいを踊ったことです。鹿児島の総踊り曲である「いっだましい」をホストファミリーと踊り、私のこと、鹿児島のことを知ってもらえました。

鳴子を持って楽しそうに踊る姿を見て音楽や芸術は国境を超えても繋がれるのだと体感しました。この1週間たくさん泣いた分、それ以上に強くなりました。カンボジアは、私の第二の故郷です。カンボジアが、そして、ホストファミリーが大好きです。必ず、カンボジアに帰り今回の恩送りをしたいです。また、自信は経験からも得られるものだ実感しました。1つのきっかけ次第でこんなにも人は変われるんだ、涙は人を強くする、そんなふうに感じました。これがゴールではなくここからがスタートだと思いこれからの人生、自信を持って過ごしたいです。また、この機会を下さった多くの方への感謝の気持ちを忘れず日々夢に向かいます。

Dream come true!



(本人：左上) ホストファミリーと過ごした最後の夜



(本人：中央) ホストマザーと誓った固い絆
またいつか会える

団員が感じたこと

オークン カンボジア

南九州市立川辺中学校3年

津平 貴史

仁川からプノンペンへの約6時間の空の旅は一瞬で、目を覚ますと闇夜に無数の街明かりが輝いていました。初めての海外旅行で入国審査に挑むと、指紋認証に手間取り、審査官に恐らくクメール語で「早くしろ」と怒られる苦い経験をしました。不安が高まりましたが、どうにか乗り切りました。外に出ると、熱帯特有のむっとした空気と、知らない言語が飛び交う中、「海外に来たのだな」と実感しました。宿泊先のホテルは21階で、そこから見える夜景は美しく、想像していた開発途上国の姿ではありませんでした。

翌朝、JICA事務所を訪れ、カンボジアの教育について学びました。義務教育（小中学校）でさえ留年があり、家の手伝いや経済的理由で退学を余儀なくされる子どもたちも多いそうです。学びたいのに学べない事はどんなに辛い事か。私は恵まれているのだと実感しました。その後、ホームステイ先へ向かうバスに乗り込みました。言葉の壁への不安が募る中、ホストマザーが出迎えてくれ、私を抱きしめてくれた瞬間、不安も晴れました。その後は、同級生の男の子「パーニャ」とテニスをしたり、日本の文化をアルバムで紹介したりして楽しい時間を過ごしました。想像以上に快適な生活で、水道はないものの、スコール後にためた雨水で体を洗うと爽快感がありました。夜には散歩中、急なスコールで近くの家に避難し、そのまま一緒に遊んだこともありました。人々の距離がとても近く、村が一つの家族のようでした。

ステイ中には、JICAの活動視察も行いました。井上隊員が千人以上の生徒がいる小学校で算数を教えており、初めてパソコンで作成したテストを実施した話を聞きました。文字が苦手な子どもたちが、算数を楽しむきっかけを作ろうとしていました。また、古山隊員はJAXAのデータを使い、降雨状況を自動で把握して効率的な洪水対策に役立てていました。彼らがカンボジアに来た理由は「興味があるから」であり、全てが「施してあげたい」からではないと話していました。上下関係を避け、カンボジアから学び、その恩を返しているのだという姿勢に、国際協力の本質を感じました。

私もホストファミリーへの恩返しとして、クメール語で手紙を書きました。その時の家族の笑顔は今でも忘れられません。別れの日には涙が溢れ、ガラス越しにハイタッチをしながら、いつかまた再訪すると誓いました。

トゥールスレン虐殺博物館では、かつて行われた拷問の残虐さに直視するのが辛かったですが、歴史の過ちを繰り返さないためにも決心して学びました。暗い過去を乗り越え、温かく接してくれたホストファミリーへの感謝が一層深まりました。

帰国後、親の顔に安堵しつつも、疲れで何も話せませんでした。家で湯船に浸かりながら「感謝を伝えなければ」と強く感じました。この一週間、ホストファミリー、団員、同行者、事務局の方など、多くの人々に支えられていたことに気づきました。だから、ここで伝えます。「オークン」（ありがとう）。



（本人：右から二番目）村の友達と記念撮影



（本人：左）ホストマザーと洗濯

団員が感じたこと

私が出会ったカンボジア

鹿児島県立大島高等学校1年

川節 桃香

嫌だ！日本に帰らない！バスから降りない！！カンボジアでの活動が終わり空港へ向かうバスの中で私たち団員はみんなカンボジアの虜になっていて、帰りたくないと呼びかけていたのを覚えている。そこまで私たちをカンボジアの虜にさせたのは、現地の方々の優しさがあったからだ。ホームステイ先に入村したときは、ホストファミリーが何を言っているのか何一つ分からず、これから4日間も一緒に生活できると不安でいっぱいになった。多分ホストファミリーも思うように会話ができず苦労していたと思う。そんな中でもホストファミリーは、一生懸命ジェスチャーで伝えようとしてくれたり、自ら日本語を学ぼうとしてくれたり、何よりいつでも私に笑顔で接してくれた。そのおかげで、徐々に不安が減ったと同時に笑顔が増えていった。最強のコミュニケーションツールは笑顔。笑顔さえあればなんとかなる、そう思うことができた

また、ホームステイでは驚きの連続だった。朝はリアルコケコッコで起きる毎日。高床の床には隙間があって、家の周りにはアヒルとニワトリと牛。トイレは水洗トイレではなく、トイレトーパーもない。お風呂は川からの水をためてそれを浴びる。日本に住んでいる私にとっては、最初は決して快適と言える環境ではなかったが、ホームステイ最終日には高床の家も居心地がよく、カンボジアは私の第二の故郷だと思えるまでになった。今回の研修で1番印象に残っていることは、トゥールスレン虐殺博物館訪問だ。そこはもともと高校だった場所だが、ある日を境にポル・ポト政権下で知識人や技術者などを収容、拷問、殺害の場所として使用された。しかし、博物館を見学していても、ここでたくさんの人が殺されたという実感が湧いていない自分がいたが、実際に亡くなった方の骸骨を目の当たりにした時、こんなに多くの方が内戦でなくなったこと、そして知ろうとしていなかったことを当事者に対してとても申し訳なくなった。彼らがどのような気持ちだったのか私には想像がつかない。ポル・ポト政権時代から30年ほどたった今でも、知識人が虐殺されたため「人を育てる人」がおらず他の東南アジアの国々に比べカンボジアは学力が低いこと、

内戦を経験した人々が負った消えることの無い身体的、精神的な傷、決して十分とは言えない衛生環境、食事の栄養面、医療事情など内戦の影響を受け、私たちはカンボジアの方々の素敵な笑顔や優しさに触れることが出来たのだ。この研修でカンボジアの人、カンボジアの歴史、カンボジアの文化、カンボジアの環境などたくさんのカンボジアに出会うことが出来た。また、この研修を通して将来、世界の子どもたちが笑顔でいられるような手助けをしたいそう思えた。幸せとはなにか、自分が今できることはなにか、多くのことを考えさせられる7泊8日となった。私はこの事業に参加してよかった。心からそう思う。



(本人：右から三番目) 私のカンボジアの家族



(本人：中央) ホストファミリーとの別れ

第2の故郷 カンボジア

鹿児島修学館高等学校2年

児玉 花菜

「またカンボジアに帰りたい。」

今、私は毎日そんな気持ちで過ごしています。

渡航前の私は、日本人がカンボジアの人に何かをしてあげるといった感覚がありました。事前研修でカンボジアの衛生状態やインフラを知り、また触れたことのない言語を使つての生活に不安のほうが大きかったのが本音です。

事前研修を通して、カンボジアの環境や文化を「受け入れる」ということを考えて、旅に臨みました。

日本からの長旅を終え、カンボジアの小さな村に到着しました。到着する頃は丁度スコールの時間でした。大雨なのにも関わらず、そこにはたくさんの村の人達が迎え入れてくれました。ホストファミリーたちは、自分の家に来る子を一生懸命探していて、見つけたときはハグをしている姿を見て、私達が来ることをこんなに楽しみにしてくれていたんだというのが第一印象でした。

雨がやみ、一面に広がる緑と赤土、放し飼いの牛や鶏などの動物、開放的な住まいに私の不安な気持ちはすぐにかき消され自然の恵みと共存している環境にどこか安らぎを感じました。

私のホストファミリーの両親は、ポルポト政権の影響により学校に通うことができなかったため、クメール語を読むことができませんでしたが、ジェスチャーや表情を使って一生懸命さまざまな事を教えようとしてくれました。早起きし美味しいご飯を作ってくれて、口に合うか優しく見守ってくださいました。

また、散歩していると、ほとんどの人と会話をしたり、家に家族以外の人沢山きていたり、まるで村全体が一つの大きい家族のようでした。言葉は十分に通じなくても、たくさんの友達ができ思い出ができました。村の人はみんな純粋で素直で笑顔に溢れ、とても居心地の良い人たちばかりでした。

日本では核家族化で高齢者の介護問題、育児がワンオペになり母親がノイローゼになったり、虐待するニュースなどがあつたを絶ちません。この村のような環境で生活しているとそういうことも無縁なのではないかと思いました。

インフラが整っていない不自由さも多少ありましたが、そんなことが苦にならない心の通い合う惜しみないあふれる愛情を体験をすることができ、自分が「受け入れる」というより、ホストファミリーと村の人たちによる、自分のためにしてくれたたくさんのおもてなしに助けられながら、自分と村の人たちが「共存する」・「馴染む」ことができたのではないかと思います。

また、不自由さが家族や村の人との絆を強くするのではないかと考えるようになりました。今でも2日に一度は元気かと連絡をくれる彼女たちは、私にとって第二の家族のような存在です。

今回、他にもカンボジアの教育、医療、文化から残酷な歴史などたくさんの貴重な経験と一生の財産になる学びをすることができました。

団員の皆様とこのような貴重な体験をさせていただいた多くの方々に感謝申し上げます。オークンチュナム！



(本人：左から二番目) 私とホストファミリー



(本人：右) 遊びに来てくれた村のお友達

団員が感じたこと

私の2024年の夏

鹿児島情報高等学校2年

濱畑 和花

あっちの気温は鹿児島より高いんじゃないか、あっちではどんな生活をしているんだろう、と期待と不安があった私のカンボジア研修。そして団員のリーダーとして上手くみんなをまとめていけるかという不安もありました。

プノンパンの空港を出て、初めてカンボジアの外の景色を見た時の気持ちは今でも忘れられません。首都はたくさん的高層ビルに多くの歴史的建造物、大きなメコン川、とたくさんの驚きがいっぱいでした。しかし、私には最も不安に思うことがありました。ホストファミリーとの交流です。私は過去にニュージーランドでホームステイをした経験があります。充実していましたが、その時あまり自分のことや、自分の家族のことについて多く話せなかったことが今でも心残りでした。今回のカンボジアでも上手くいくか分からず、不安で仕方ありませんでした。初めて私のファミリーと会った日、スクールの中でしたが、私のおばあちゃんは笑顔で私のことを抱きしめてくれました。その時、この一週間は絶対にうまくいくと私は確信しました。

カンボジアにいた間は、とても自然体でいることができました。言葉が通じない中でしたが、あらかじめ用意していたアルバムで自分のこと、そして家族のことについて話せました。近所の子供達とも一緒に遊んだり、日本の歌を歌って見せたりしました。中でも、一番やってよかったと思ったことが、料理を作って振る舞うことです。日本から持ってきたカレー粉でドライカレーを作ったところ、家族のみんなが美味しいと言ってくれました。私の四日間のホームステイ生活は一瞬で終わりを迎えてしまいましたが、やり残したことは一つもありませんでした。ホストファミリーとのお別れの時、私はたくさん泣きました。その頃には現地の水しか出ないお風呂、そしてトイレ、エアコンのない生活にはもう慣れを感じていました。

日本はとても恵まれています。毎日学校に通えて、家庭に電化製品があるのは当たり前、そしてトイレやお風呂などの水回りもとても綺麗です。カンボジアでは、それが当たり前ではありません。ですが、私はカンボジアにいても十分幸せに生活できると思います。

カンボジアの人々はとても気さくで、村全体が家族のようでした。こんなにあたたかいカンボジアが、私は大好きです。

帰りに空港に戻った時には、もう周りの景色に驚くこともありませんでした。カンボジアに行って、今までの開発途上国のイメージも全部が変わりました。貧困に苦しんでいて、先進国からの支援を必要としている国だったのが、温かく、幸せのあり方を教えてくれる国、そして異文化交流の大切さを教えてくれる国になりました。カンボジアに行ったことで、私は今の生活にありがたみを感じられるようになりました。そして、このカンボジア研修を、16人のかけがえのない仲間たちと共に過ごせたことも、私の2024年の夏の一番の思い出です。



(本人：右から二番目) 私のホストファミリー



(本人：前列右) 17歳の誕生日

世界に羽ばたく団員達の未来に 栄光あれ

(公財) 鹿児島県国際交流協会 専務理事

松下 正

ホームステイ先のダウン・デアヴ村が近づくにつれて、団員達の口数が少なくなり、徐々に緊張感が高まっていく。到着と同時に激しいスコールと村人の歓迎を受けた。小降りになったところで団員達は不安そうな顔でホストファミリーに引き取られていった。高床式の家に、電気は通っていた。台所はカセットコンロを使用していたが、薪を使っている家もあった。トイレとお風呂は事前に聞いていた通りで、お風呂は川の水をくみ上げていた。このような状況に、日本に帰りたい、との団員の声も漏れ聞こえた。

その夜、突然警察官から事情聴取を受けた。冷や汗をかきながら滞在の趣旨を説明したところ、警察官は理解してくれた上に、離村までの間つきっきりで私たちの警備に努めてくれた。オークン（ありがとう）。

翌朝村を散歩した。家々の前に飼い犬が放し飼いられていて吠えられ、行く手を遮られる。午後は村の子供達とバレーボールを楽しんだ。スポーツに言葉はいらず、村のバレーコートには子供達の歓声が響いた。また、小さな子供達が団員のまわりに群がった。夕食時にはホームステイ先に家族以外の村人も集まり、ジェスチャーでコミュニケーションを図りながら、団らんを楽しんだ。そこには笑顔が溢れていた。村そのものが家族のようなつき合いがあり、結いの心に満ちていた。半世紀ほど前の故郷を思い出した。

日にちが経つにつれて、村の生活に溶け込んでいく団員達の姿が見られた。日本に帰りたくない、ずっとこの村に居たいという声が聞かれた。そしてお別れパーティーでは村のみんなと輪になって踊り続けた。別れの日、ホストファミリーと団員達が互いに号泣して別れを告げている姿に、ついもらい泣きした。

それにしても、滞在期間中の団員達の成長には目を見張るものがあった。ボディランゲージで村人と会話し、子供達を引き連れて仲良く遊び、カンボジアで活動する青年海外協力隊には真摯に質問を行い、お別れ会の準備では薪割りや米研ぎなども積極的に手伝い、市場では習いたてのクメール語を駆使して堂々と値切り交渉していた。そしてトゥールスレン虐殺博物館では語り部の話に耳を傾け静かに祈りを捧げていた。

団員達には、異国の相手とコミュニケーションを図り、誰かの役に立ち、幸せのために学んでほしいと期待していたが、しっかり体得してくれていた。これからも、鹿児島や日本の枠を超えて、世界の人々が幸せに暮らしていくために必要なことを学び続け、世界に羽ばたく若者になってほしいと願っている。

ダウン・デアヴ村をはじめとするカンボジアの皆さんから受けたご恩は忘れない。10年前6千4百人だった県内の在留外国人は今や1万6千人を超え、今後とも増加することが見込まれている。どの国から来た外国人にも、思いやりの心を持って接することが私たちにできる恩返しの一つであると思っている。

最後に本体験事業の実施に当たって御支援・御尽力いただいた全ての皆様に心から感謝したい。



ホストファミリーとの朝食



ホストファミリー家の2階から、旅立ちの朝

同行者が感じたこと

子供たちの力

青年海外協力隊カンボジアOV（野球）

佐藤 貴之

私は今回の体験事業同行者で唯一のカンボジアOVである。5年ぶりのカンボジアで同行者として責任を果たせるか、内心ドキドキではあったが、2回の研修を通して、その不安は除かれ、カンボジアに行ってから大丈夫だ。と確信を持つことができた。それは、団員たちの表情からくるものであった。

カンボジア派遣前の研修では語学訓練とカンボジアについて、そして国際協力についてのワークショップを行い、事前準備を行った。そこでは、積極的に参加する団員の姿があり、カンボジアに関する質問であったり、国際協力とは何かを真剣に考えたりしていた。もちろん、不安を払拭するための行動でもあったと思うが、皆がこれからのカンボジアでの体験を楽しみにしているように私は感じた。

そして、実際にカンボジアに派遣され、ホームステイ先と顔を合わせた。村に着いたとき、ちょうどスコールが降り、なかなか身動きが取れない状態ではあったが、ホストファミリーは暖かく私たちを出迎えてくれ、それぞれ団員たちの手を取り、家に戻っていった。私もホストファミリーの家に行き、少し話をした。その後、村を歩き、団員がどのように過ごしているのかを見て回った。言葉が通じない不安や家族と離れて、異国の地でのホームステイに多くが不安な顔をしているのかなと思ったが、杞憂に終わった。多くの団員の顔がいつも通り、もしくは楽しそうにカンボジアの子供たちと接していた。それだけでこのような感覚を持つのが良いわけではないが、私の直観で「大丈夫だ!」と感じてしまった。それと同時に私は、団員たちの適応しようとする力の凄さを感じた。私が中学生や高校生の時を思い返したときに、団員たちと同じように全くの新しい環境で楽しむことができるのだろうかと考えたが、すぐに「自分ではできない」と思ってしまった。それくらい団員たちの力というのは素晴らしいものだと感じる事ができた。

その他にも協力隊の活動視察や地元中学生との交流、市場で買い物も経験してきたが、どこに行っても積極的にカンボジア人とコミュニケーションをとろうとしたり、理解をしようとしたりする行動が見え、感心す

るばかりであった。

7泊8日を終えるときには、団員たちからやり切った顔とカンボジアを去る寂しい顔の両方を見ることができたことは同行者としてとても嬉しく、今回の体験事業が成功であったと感じることができた瞬間であった。

ここでの経験は今後、同じように経験したいと思ってもできるものではない。初めての海外や普段とは異なる環境での生活は団員たちにとって寂しさや不安もあったと思うが、とても有意義なものになったと思う。だからこそ、帰国した今、改めてカンボジアでの経験を思い返してほしい。自分が何を見て、何を感じたのか。カンボジアからもらったものは何なのか。それらの全てが自分の今後の力になるはずである。新しい力を得た団員全員の更なる成長を期待したい。



お別れ会で「旅立ちの日に」を



(本人：左) ホストファミリーと一緒に

同行者が感じたこと

オークン・チュラン カンボジア！

青年海外協力隊パラグアイOV（家政）

サナブリア 智子

初めて降り立ったカンボジア・プノンペン国際空港は夜中にもかかわらず沢山の人がいて、活気に満ち溢れていた。外国語のざわざわした感じはとても心地良い。

今回この事業に同行が決まった直後からカンボジアについて色々調べた。歴史、文化、言葉、食生活。知らない事ばかりで、早く自分で体感したいと思った。

2回目の宿泊研修を終えるころには16名の団員、そして同行者とも心がつながり、このメンバーでならきっと素晴らしい体験事業になるに違いないと確信した。

私たちがお世話になるホームステイ先はシエムリアップ州の世界遺産アンコールワットからバスで1時間弱のダウン・デアヴ村。

そこはゆっくり時間が流れ、夕方は家々から炭の香りが漂う。牛の鳴く声や遠くから聞こえる音楽、道端で寝転ぶ犬の姿。なんて平和なんだろう。

20年前、私が青年海外協力隊で生活したパラグアイの風景にとってもよく似ていた。

だからなのか、すんなり生活を受け入れることが出来た気がする。

私がお世話になったホームステイ先は築50年の木造高床式住居で、大きな隙間がたくさんある家。家族は祖父母と息子夫婦の7人。はじめは家の中に動物や虫が入ってきたらどうしようと、とても怖かったけれど、寝床の隙間から見える月はとてもきれいで、涼しい風が入ってくる素敵な家だと感じるようになった。何より自分を守ってくれる蚊帳のおかげで安心して眠ることが出来た。日本ではエアコンが無いと眠れないのに不思議だ。

生活する中で一番苦労したのは入浴。お風呂とトイレが一緒になった離れの小屋で、専用の布を体に巻いて水浴びをする。色々と浮いている貯めた水を桶ですくい、頭や体にかける。はじめは気になっていたが3日目くらいからはどうでもよくなり、気持ち良いと感じた。

食事に関してはびっくりするくらい順応した。白米に焼いた肉や野菜炒めなどを乗せてワンプレートで頂く。ほんのり甘くて鹿児島の味付けに似ていると感じ

た。食べ終わってほっとしていたら皿の上にはお代わりが乗っていて、ママが食べなさいと促してくれる。なんて優しいんだろう。

家にはテレビや洗濯機などはないけれどスマートフォンやWi-Fiはあり、子供たちはハンモックでyoutubeを見ていた。30代の息子さんは英語が堪能で夕飯時にカンボジアと日本の働き方について英語で議論したほどだ。

私たちは村と聞くと文明も遅れているのではないかと勘違いしてしまうが、全くそうではない。村の人々は昔からの生活スタイルを引き継ぎ、この美しく平和な場所で幸せに暮らし、何より心からの笑顔がそれを物語っている。今も家族とは翻訳アプリを使いSNSで交流を続けている。今回の滞在で私はやっぱり人は皆同じだということと人の温かさを知った。クメール語が出来ない私に常に寄り添い、手厚くもてなしてくれた家族。帰る日は涙が止まらなかった。今回このような機会を与えてくださったことに心から感謝したい。心からオークン・チュラン！（ありがとう！）



（本人：右）ホストファミリーと家の前で



（本人：左）お別れの日

同行者が感じたこと

カンボジアを通して感じたこと

青年海外協力隊スーダンOV（看護師）

五反田 えりな

高層ビルが建ち並ぶ首都プノンペンからバスで5時間半程走り、水田が広がる自然豊かなホームステイ先、シェムリアップ州ドゥン・デアヴ村でのホームステイが始まった。村に到着しバスから降りると、ホストファミリーが駆け寄り、各々の受け入れる団員を探し研修で学んだクメール語で挨拶を交わす。ホストファミリーが付き添い荷物を運び誘導してくれる。

村の家はほとんどが高床式で、電気が通り、家電は電灯と扇風機、冷蔵庫、冷凍庫。人が入るくらい大きな水瓶の水を料理やお風呂、洗濯など生活用水として使用する。

ホストファミリーは若い夫婦と双子の子供たち。言葉が通じず、戸惑ったが、家族それぞれにスマートフォンを持っており、通訳アプリを使って細かいコミュニケーションがとれた。

村での朝は早く、朝5時くらいに起床し朝の支度が始まる。バイクに乗る子供たちが多くみられ、ホストファミリーもみんなバイクを持っており、朝7時頃には制服でバイクに二人乗りして通学するのを見送る。そのあと、夫婦と私がご飯を食べ、一緒に料理や洗濯をして過ごした。日が昇り沈むまで、自然に合わせて働き、生活する。子供も大人も血縁関係なく家を行き来し、村全体が家族のよう。1日がゆっくりと穏やかに流れるのを感じた。

初日、自分の想像より豊かな生活だと感じたが、青年海外協力隊の活動先で学校教育の現状を知った。ポルポト政権下での虐殺が影響し、子供に対し教員が不足し、大半の学校は午前・午後の2部制がとられている。家庭によっては子供が貴重な労働力とされ、学校に通えないこともあるそうだ。小中学生でも、成績によっては留年や退学する子供が多いことには驚かされた。また、現地ガイドのチョーダさんはポルポト政権以後に生まれ、学びたかったが高校まで行けず、独学で日本語を学んだ。みんなのように学べる事がうらやましいと話す姿に、学べる事の有り難さを感じた。

ホームステイ先の人々はほとんどが農業に従事しており、豊かな生活ではない中で私たちを受け入れ、あなたは私たちの家族だと言って接してくれた。最後の

夜は遅くまで将来の夢や、思春期の悩み、日本やカンボジアについて時間を忘れて話をした。

別れの時、涙する団員や笑顔で最後まで離れがたいと話す団員と、それぞれが別れを惜しみながらバスに乗り、見えなくなるまで手を振っていた。ホームステイ先で慣れないカンボジア語、指差し会話帳や翻訳アプリと様々な方法を用いコミュニケーションをとり、その適応力には驚き、徐々に笑顔で会話し遊ぶ姿が忘れられない。

今回の体験事業で、団員それぞれに様々な気づき、自身の変化があったのではないかと思う。これからの皆さんの成長と、未来の姿が楽しみである。私自身この体験で、今ある日常が当たり前ではない事、個人や国にとっての幸せや最善とは何か、これからも自分に問い続け考えていきたいと思う。



（本人：右から二番目）ホストファミリーと



ホストファミリーがお団子づくり

同行者が感じたこと

カンボジアの夏

南日本新聞社 編集局報道部 記者

鹿島 彩夏

鹿児島県青少年国際協力体験事業でカンボジアに派遣された中高生16人は、鹿児島の伝統的な民謡「おはら節」を現地で披露した。踊りの輪を内側から撮ると、1人1人の表情がよく見える。外側に出ると、輪の全体像を映し出すことができた。同じものを見ていても、立ち位置によって見え方は全く異なる。同行取材をした8日間もまた、異国の地を内から体験すると同時に、外から日本を見つめ直す機会になった。

「貧困」「内戦」「地雷」―。派遣前、カンボジアに過酷な印象を抱いていた。風呂に入れなかった時に備え、水を使わずに体を拭く災害用のシートを購入。手回し充電器や寝袋までスーツケースに詰め込み、出発した。

ホームステイ先は、シェムリアップの農村部コミュニティ・デアヴ村。到着と同時に大雨に見舞われ、ホストファミリーと笑い合いながら家路へと急いだ。軒先が広い家が多く、雨宿りにはぴったり。アスファルトの照り返しやエアコンの排熱がないせいか、日本より涼しく感じた。

山がなく、畑や田んぼのアップルグリーン色の地平線が広がる。道路でボール遊びをしても、誰にもしかられない。手をつなぎ、道路いっぱいに広がって歩く子どもたちの背中を見て開放的な気持ちになっていった。

シェムリアップに20年以上暮らす日本人は「一昔前の日本にそっくりで住み心地が良い」と教えてくれた。年期の入った服を着た人が多いが、特別な日のために、みなお気に入りの1着を大切に持っている。血縁に関係なく家を行き来し、他の家庭で食事をする 것도。村全体をつなぐ家族のような絆を感じた。

「日本料理が食べたい」と、ホストファミリーから提案された時は焦った。卵焼きを作ることにしたが、味付けから苦戦。醤油の入れすぎを隠すため卵を8個も投入した。中華鍋で焼いた「卵焼きのような何か」が完成。居合わせた熊本創平アナウンサー＝鹿児島読売テレビ（KYT）＝の「現地料理みたい」とのコメントが忘れられない。

「貧しくてかわいそうな国だと思い込んでいたが、村の人はいつも笑顔だった」「助けてあげるではなく、

支え合う関係が必要」。ホームステイを通じ、中高生の国際交流への考え方は大きく変化した。未知を恐れず、柔軟に思考をアップデートしていく子どもたちがまぶしかった。

ホームステイ終盤、別れを惜しみ涙する中高生が相次いだ。カンボジアには、1970年代後半、知識人を中心に国民の4分の1近くが虐殺された「ポル・ポト」政権下の悲しい歴史がある。地域のつながりを破壊された過去を乗り越えてきたからだろうか、村の人々は涙が苦手だ。「泣いたらダメ。笑って」と励ます姿を何度も見た。

そんな村の人々も別れの時には涙をこらえきれなかった。言葉も文化も異なるわたしたちをまるごと受け入れてくれた現地の人の心は豊かで温かかった。「また必ず会いたい」と思える出会いに恵まれたことがなによりの財産だ。



（本人：左）お別れ会に正装で参加するホストマザー



（本人：右）ホストファミリーからプレゼントされた洋服で現地の子供たちと交流

同行者が感じたこと

オークン！カンボジア！大切な家族

鹿児島読売テレビ 報道制作局 アナウンサー

熊木 創平

「取材者として視野を広げ、成長する機会にしたい」。会社で自ら志願し、カンボジアに同行した。出発の日が迫ってくるにつれて不安な気持ちも増したが、帰ってきて思うのは、手を挙げて一歩踏み出して本当によかったということ。社会人になって最も心が動いた1週間だった。

隣国のタイやラオスに旅行で訪れたことはあったものの、村でのホームステイは初めて。初日は蚊帳の中でも虫におびえていたが、辺りが暗くなったら寝て、ニワトリの鳴き声で目覚める生活が徐々に心地よくなってきた。私のホームステイ先は3世代世帯で、1歳の女の子とは「言葉の壁がなかった」のでどこか安心感があった。ある朝、ホストブラザーが指差したのは、庭のヤシの木。棒で突いて実を落とすと、その場で割ってコップに注いでくれた。ヤシの実のジュースだという。あまりの早業に思わず見入ってしまった。味は自然な甘みがあっておいしかった。ただ、現地の方でもお腹が痛くなる人もいるというので要注意。ちょうど雨季ということで、スコールは毎日ほぼ同じ時間帯に降っていた。雨水はバケツに溜め、料理や皿洗いにも使っていて生活と密接につながっていると感じた。

何より印象的だったのは、ホストファミリーの温かさ。私が他の家庭に取材に行く時、朝でも夜でも必ず家族の誰かが付き添ってくれた。中でも私のホストファザーは社交的で、行く先々のアクティビティに参加し、その場を盛り上げてくれた。そのため、バレーボールやカレーライス作りなど、私の撮影したほぼ全ての映像に映り込んでいる。思い返せば、ホストファザーは私の取材に同行する中で一緒に過ごす時間を楽しんでくれていたのだと思う。ある日の帰り道、私の壊れたサンダルを見て「俺のを使え」と自分のサンダルを貸してくれた。翌日、元通りになった私のサンダルが家に置いてあった。そんな男前な一面も見せてくれた。村を離れる時は必死に中高生たちにカメラを向けていたが、そんな私のもとにも私のファミリーが集まる。いつも陽気なファザーから全力のハグをされた。思わず目頭が熱くなった。ファザーはほとんど英語をしゃべらなかったが、最後に「ファミリー」と一番う

れしい言葉をくれた。

そうした温かさに触れたからこそ、「トゥールスレン虐殺博物館」は心にズシっとくるものがあった。事前研修から繰り返し聞いていた大量虐殺の歴史。その痛みを少しだけ共有できた気がする。

中高生たちからは積極的に行動することの大切さを改めて学んだ。お湯やシャワーのない風呂、手洗いでの洗濯。自分の経験したことのない状況でも果敢にチャレンジしたり、言葉が通じない中でも笑顔とジェスチャーで必死に思いを伝えようとしたりする姿にパワーをもらった。

この7泊8日がこんなに学びの多い、かけがえのない時間になるとは思わなかった。視野が広がり、価値観が変わった、まさにお金で買えない経験となりました。

本当にありがとうございました。



(本人：右前) ホストファミリーと



(本人：中央) 取材の様子



Meeting on March 16



Meeting on July 21



Meeting on July 27



Meeting on June 15

Email message from Mrs. Yun Sinang

Cambodian Program-coordinator FY2024



Date: July 27,2024

Yesterday, after the departure of the delegations, I had a meeting with all the host families to reflect on the homestay experience. They expressed how much they miss their delegates, even though it was a short period. They all built great memories, as all the Japanese delegates showed much love and treated them like their own children and family members. They are very proud of the good attitude, politeness, and kindness of the Japanese people.

Through this experience, they have learned many positive things from your people, which they can apply to their own families, especially their children. As a result, they wish the delegates could stay longer and do not want them to leave their village. They all cried when saying goodbye to each other.

Warm regards,

Sinang



KYT news every.かごしま



特集 来週1週間 ホームステイ every.
県内の中高生 いざ!カンボジアへ

県内の中高生いざ“カンボジア”!
来週1週間ホームステイ
7/19(金)OA

<https://youtu.be/qqsDcvqzs4Y?si=z9xMDyFTwiOCCXVt>



体験 県青少年国際協力体験事業
カンボジア派遣の中高生 帰国報告
付でホームステイやJICAを視察
KYT本社
きょうと・鹿児島市
県内の中高生16人
県青少年国際協力体験事業で
カンボジアに派遣

県青少年国際協力体験事業
カンボジア派遣の中高生帰国報告
ホームステイや視察行う
7/30(火) OA

https://youtu.be/J6u6_2hF6fI?si=D2S4meAjl8o5x0gW



特集 期待と不安を胸に 熊本キャスター同行 every.
「カンボジア滞在記」中高生16人の旅

「カンボジア滞在記」中高生16人の旅
期待と不安を胸に出発 熊本キャスター同行
8/20(火) OA

<https://youtu.be/8yprUEGLVMk?si=VvfjODINqx7iviD3>



特集 中高生16人 熊本キャスター同行取材 every.
「カンボジア滞在記」驚きのホームステイ

「カンボジア滞在記」県内中高生16人
ホームステイは驚きの連続
8/21(水) OA

<https://youtu.be/zS7YjqGZWwk?si=iiTYgJQPbnjG7LAV>



特集 JICA隊員の活動を中高生が視察 every.
カンボジア滞在記③教育の課題

カンボジア滞在記③ 教育の課題
JICA海外協力隊の活動を中高生が視察
8/22(木) OA

<https://youtu.be/HQTO31NSIJA?si=o4IHzyIYOHyx6oBB>



特集 県青少年国際協力体験事業 every.
涙の別れ…「カンボジア滞在記」

涙の別れ「カンボジア滞在記」
中高生が現地で感じたことは?
8/23(金) OA

<https://youtu.be/1RwcZN2YI-o?si=88Wb6zcN-DZZW61b>



「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：鹿児島県、鹿児島県教育委員会、独立行政法人国際協力機構九州センター

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～17名の中学生、高校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

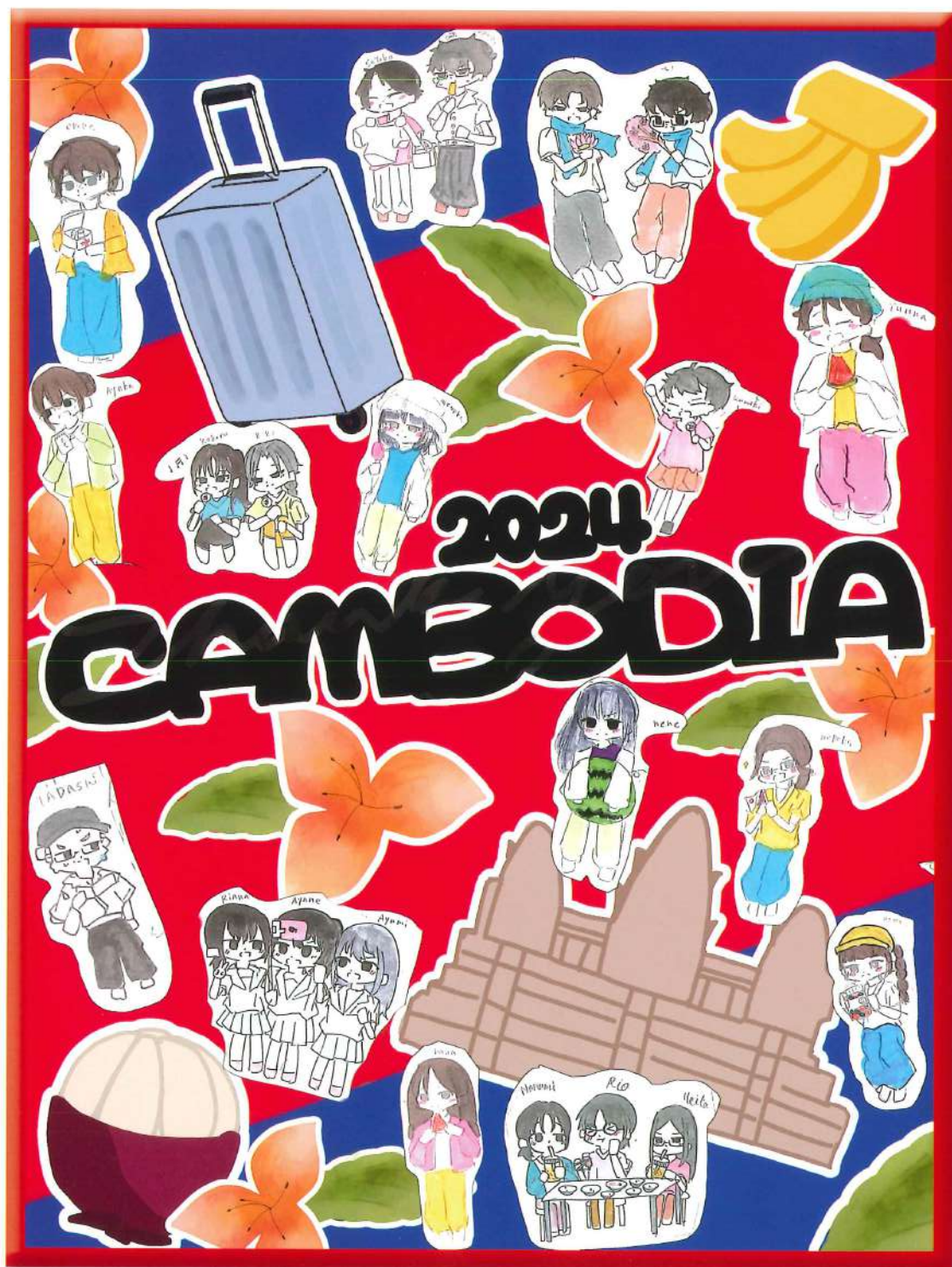
派遣の前後に事前研修会、表敬訪問、報告会なども実施

6 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (コタバル、明マドゥ)	平成3年 3/27(水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、阿久根市、名瀬市、市来町、 伊集院町、祁答院町、内之浦町、佐多町	公募
第2回	マレーシア (スラバヤ)	平成4年 3/27(金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、鹿屋市、大口市、指宿市、隼人町	公募
第3回	マレーシア (クア、ラガアイ)	平成5年 7/23(金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、加世田市、三島村、隼人町、 志布志町、高山町	公募
第4回	インドネシア (バンドン、バンナナ)	平成6年 8/1(月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市、出水市、指宿市、垂水市、 菱刈町、霧島市	公募
第5回	マレーシア (コタバル)	平成7年 7/30(日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市、国分市、鍋ヶ崎町、宮之城町、 隼人町、吾平町、根占町、中種子町	公募
第6回	マレーシア (タイピ、パルットムントリ)	平成9年 7/27(日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市、串木野市、東市来町、伊集院町、 郡山町、日吉町、吹上町、金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クア、ラガアイ)	平成10年 7/26(日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市、大口市、国分市、菱刈町、 始良町、蒲生町、満辺町、横川町、栗野町、 吉松町、牧園町、隼人町、福山町	市町村推薦
第8回	タイ (アタ、カオ)	平成11年 7/30(金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市、指宿市、加世田市、喜入町、 笠沙町、知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チェンマイ、メカホン)	平成12年 7/24(日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、国分市、垂水市、 祁答院町、財部町、末吉町、串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチン、フタ)	平成13年 7/20(金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市、出水市、加世田市、国分市、 垂水市、祁答院町、満辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチン、タピ)	平成14年 8/4(金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市、串木野市、枕崎市、 国分市、垂水市、満辺町	市町村推薦
第12回	タイ (予定:ナラティワン県)	平成15年度 SARS及び 鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア (クアランプール、マラカ市、ヒラガ州)	平成16年 7/19(月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市、枕崎市、国分市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム (ハノイ、ホーチン省、フタ村)	平成17年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、枕崎市、串木野市、 国分市、知覧町、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア (クアランプール、マラカ市、ヒラガ州)	平成18年 7/22(土)～7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、 知覧町、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム (ハノイ、バク省、バク省)	平成19年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、知覧町、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県、タム村)	平成20年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県、タム村)	平成21年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシヤ州、パタ村)	平成22年 8/1(日)～8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、 南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア (ケランタラ州、タタ村)	平成23年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム (ホーチン市、フタ省、フタ村)	平成24年 7/22(日)～7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、 南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム (タナ市、フタ市)	平成25年 7/21(日)～7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、 南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア (アムパ、カダボン)	平成26年 7/20(日)～7/27(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア (アムパ、カダボン)	平成27年 7/19(日)～7/26(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第25回	ラオス (ビエンチャン県、ビエンチャン県)	平成28年 7/24(日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第26回	ラオス (ビエンチャン県、ビエンチャン県)	平成29年 7/23(日)～7/30(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第27回	スリランカ (西部州、ガンパハ)	平成30年 7/25(水)～8/1(水) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第28回	カンボジア (アムパ、カダボン)	令和元年(2019) 7/21(日)～7/28(日) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第29回	ラオス	令和2年(2020) コロナにより中止	0名 (0)		
第30回	マレーシア (クアランプール、マラカ州)	令和5年(2023) 7/23(日)～7/30(日) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第31回	カンボジア (アムパ、カダボン)	令和6年(2024) 7/21(日)～7/28(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、薩摩川内市、 霧島市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
計7カ国		計(392)平均14人			



＝編集・発行＝

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町14-50

カクイックス交流センター1階

公益財団法人鹿児島県国際交流協会内

担当：上片平，飯屋，菊地

TEL：099-221-6620 FAX:099-221-6643

裏表紙デザイン： 鶴本 七望，吉井 李織